



Title	海外あちらこちら : 海外出張見聞記
Author(s)	上嶋, 勲
Citation	makoto. 1975, 10, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

海外あちらこちら

海外出張見聞記

大阪府衛生部環境保健課長

上 嶋 勲

昭和四十九年六月二十一日から約一カ月間、パリでの国際環境保健シンポジウムに出席し、さらに欧米八カ国を訪問視察する機会に恵まれましたので、その一部をここに報告します。

つゆ空に 旅やすかれと

羽田たつ

出発日の午後十時、私を乗せたスカンジナビア航空のジャンボ・ジェット機は、低気圧のため約四十分おくらせて暗雲垂れる羽田を飛び立ちました。

途中、アラスカのアンカレッジに給油のため着陸しましたが、ここですっかり快晴、しかし、肌寒い風が頬を打ち、思わず空港待合室にとびこみ、熱いコーヒーをすりました。

約一時間半休憩後、再び機中の人となりましたが、間もなく北極海に出ました。そして、大きなガラス板がブカブカ浮いているようにみえる氷山が双眼鏡で眺められ壮観でした。いつしか高度が上昇し、北極を通過し

た時は雲の上で下界は何も見えませんでした。羽田から約十一時間後のことであります。

長かった機内生活も、二ドル五十セントで借りるイヤホーンでステレオ音楽を聞いたり、ユルプリンナー主演のサスペンス映画を見たり、機内食に舌つづみを打ったりして、案外、退屈しないままに現地時間の午前六時、羽田から約十七時間半かかって北欧の国デンマークの首都コペンハーゲンに到着しました。

コペンハーゲンにて

コペンハーゲンは、ヨーロッパの北の玄関に当たり、童話に出てくるような美しい色どりの家や庭園の並ぶ郊外から市内へ入るバスの中では、老人無料バスで乗降する身なりの良いお年寄の姿をしばしば見かけました。山高帽子のアンデルセンの座像が正面右側にあり、教会を思わす尖塔のある市役所が市の中心広場にその重厚なたたずまいを見せていました。丁度私がこ

の広場に着いた時、その重々しい扉が左右に開かれ、中から、今しがた結婚式を終えたばかりのタキシードと純白のドレスに身を包んだ水々しいカップルが、手に手をとって出てくるどころでした。家族や親類、友人と思

われる十人位の人が後続していましたが、この一団は、広場に出て記念撮影の後、大通りを横切ってマロニエの純白の花咲きこぼれる街路樹の下の街頭カフェテラスのテーブルに陣取ったのであります。

そして、シャンパンを抜き、ワインやビールを傾け、オードブル程度の簡単な御馳走で祝福を受けていましたが、その飾り気がなく、それでいて家族的ではほえましい祝宴に、ナイーブな北欧の現代の姿を見たように思いました。

マロニエの 北欧の乙女

嫁ぎゆく

パリでの国際環境保健シンポジウム

パリでは、シンポジウムの会期中、すなわち五日間滞在しました。シンポジウムは、有名なエッフェル塔を背景にし、サフラン大通りに面したユネスコ本部ビルの会議場で開催されました。日本からは、大学教授や

衛研所長及び環境庁課長等五、六人が共に参加しておられましたが、オーストリアやスイス、スウェーデンに留学又は出張中の医師や物理学専攻の日本人達にも会いました。

第一日は、荘厳な音楽のあと、午前十時からオープニング

セッション、つまり、開会式が盛大に行なわれ、イヤホーンで英・仏・独・露・スペイン語がチャネルチェンジで通訳して聞ける仕組みになっていました。五百人程収容できる会議場は、八分通りの入りで、午前中は、

大会委員長や副委員長、それにW・H・Oやユネスコの代表者のあいさつが次々とあり、正午から午後二時四十五分までは昼休み、そのあと、七時近くまで、各国の研究者達により環境汚染による健康影響の評価について白熱したシンポジウムが展開されました。私は、昼休みの時、環境庁の課長さんと昼食を食べに地下鉄でソルボンヌ大学近く

まで外出しましたが、地下鉄の駅員さんも昼休みで出札所に姿がなく、それでも電車は動いていましたので、無賃乗車ができました。

討議すみ イヤホーンの我汗ぬぐう

汗ぬぐう

パリー点描
パリー滞在中、余暇を利用して市内観光もしました。私のホテルが凱旋門からシャンゼリゼ大通りに入ったすぐ近くのワシントン街にありましたので、この有名なシャンゼリゼ大通り

(ギリシャ語源で極楽の意味があるそうです)と凱旋門は、毎日の通勤路にあたりました。キャバレー「リド」や香水店「ゲラン」、それに宝石店やオートクチュール(高級洋装店)、東京の風月堂の名が由来したといわれる「フーケ」等のレストランやスナックが、バブや劇場と共にひしめいていました。夜ともなれば、これらの店のイルミネーションが美しく、歩道に長く垂れ下がるフランス国旗の列

が街の燈に美しく映え、おそらくあらゆる人種が集まってくるのではないかと思われる程、種々の服装の通行人を見ました。もちろん多数の日本人にも会いました。

しかし、朝の通勤時間帯は、パリっ子が多く、ビジネスマンやOL、BG、それに若い学生の往来がしげく、凱旋門広場の下にある地下鉄駅に急いでいました。そのエスカレーターですれ違ったヤングの顔の、あたかも石膏の美術彫刻像から抜け出たような、色白で鼻高く目もとのほりの深い美しい顔立ちが印象的でした。

画家ロートレックで有名なキャバレー「ムーラン・ルージュ」へは、シンボジウムの終った午後七時から気の合った参加者四人で出かけました。初夏のパリは、日の暮れるのがおそく、八時頃でも未だ街は明るいのですが、風車のイルミネーションの入り口に着くまでの街路には、体格の良いコールガールや人相の良くない男達が歩行者に目くばせしたり、時には、片言の日本語で呼びかけたりしていました。

私達は、お互に引っ張られないよう足早に一団となって街路を直進し、キャバレーへ入りましたが、こうした外の有様とは逆に、キャバレー内のフロントでは思ったより上品な雰囲気を感じました。婦人客はイブニングドレスに身をやつし、男の

方も身なり正しく、カッブルで入場する風景も見られました。

ショーは、九時から始まるのですが、それまでの間は、シャンパンを抜き、前菜やスープに始まるフルコースの料理で、ショー中も、各種のワインやビールをすすめられました。

こういう所であり勝ちな、タバコの煙もうもうというのではなく、空調設備が良好なのか、案外サラツとしていました。舞台はコマ劇場のようなせり上り式になっており、私達のテーブルは扇形に幾重にも取り巻いていて立見席もありました。

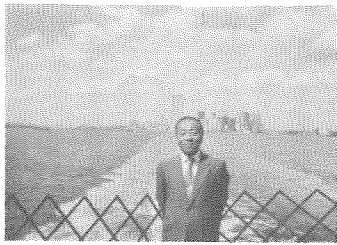
ショーの始まった時は、さすがの広い場内も満席で、中途で観光バスで来たと思われる一団が立見席を埋め、場内が一杯になる時もありました。

酒がまわり、外人独特の掛け声や奇声が出て楽しい雰囲気のうち、ショーは、バントマイムや寸劇、それに曲芸やラインダンスが混ざって楽しいものでした。司会のコメディアンが、フランス語や英語から順に、各国のことで、「ようこそいらつしやいました。ゆつくり最後までお楽しみ下さい。」といったようなことをおもしろおかしく喋りましたが、その中には日

本語もあり、また、それら自国語を聞いた客席からは、これにこたえて拍手が送られるので、どのテーブルには何国人がいるというのが分り、おもしろく感じました。

そのうちに舞台は、モンマルトル楽団演奏になる「パリーの屋根の下セーヌは流れる」や「パリー祭」、「シシリアン」中には「ゴッドファーザー」まで飛び出して、美しいメロディや、シャンソンの数々と舞台の踊りに、いやが上にも興奮のるつぽと化しました。

そして、立派な体格の女性の踊る「天国と地獄」のリズムに乗った「フレンチカンカン」は



ニューヨーク市を背にして(筆者)

圧巻でした。

ショーが終って外へ出た時は真夜中でしたが、それでも未だ街のけんそう激しく、モンマルトルの丘には月が輝いていまし

た。そして、何だか日本の月と同じ月を眺めていることが不思議に思われるのでした。

踊り子の 足宙に舞い

夜短かし

ローマにて

花やかなパリーから到着したせいでしょうか、ローマは薄ぎたなくゴミゴミしていました。

「終着駅」の映画で有名な大理石とガラスを基調とした柱のな

い広大なロビーを持つ「テルミニ駅」には、イタリア人や他国人が区別のつかない皮膚の色浅黒い目つきの鋭い人達がクロワロしていて気味悪く思いました。

その上、市内の建物のあちこちに落書きが目立ち、中には、ニクソンという英語のXが5(ハケンクローイツ)に書いてあり、さもなくしてくしげでした。

こうした外観に反し、私の泊ったホテル内は豪華なインテリアと雰囲気富んだものでした。ローマには、上水道、中水道、下水道の区別のあることを知り

ました。それは、洗面所の水は飲めるがバスの水は飲むなど注意してくれたので分りました。

コップで比較すると、少しにこりがあり区別が付きませんでした。

有名な闘技場コロッセオは、観光客でにぎわっていましたが、

野良猫の多いのはびっくりしました。まるで、高崎山のサルのようにボス猫を中心に十数匹がむれをなしていました。

しかし、パチカンやフォロ・

ローマノ、コンスタンチヌスの凱旋門やその他歴史ある建造物の数々の観賞に意義深い日を送ることができました。

夏日差す ローマの遺跡

今ここに

かくのごとくにして、その後、西ドイツ、オーストリア、スイス及び英・米を経由して帰国しましたが、西ドイツやオーストリアの都市近郊で見た宗教を基盤にしたつましやかな市民生活や、スイスでのアルプスと美しい湖を背景にした住宅や街中が緑と花にかこまれた好環境や、それを支える市民の努力に感心させられました。

また、それにつけても、レディファースト、女性天国の姿をまざまざ見せつけられたのは英国でした。

最後の訪問国、アメリカでは、巨大な高層建築物や美しい自然、風俗などに触れることが出来ましたが、アメリカという国の持つ巨大なエネルギーとその裏にある退廃と苦悩の一端をかいまみることができました。